大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十六卷　第四號

昭和八年四月一日發行

論叢

爲替心理說評價……文學博士 米田庄太郎

マルクスに於ける平均利潤率……文學博士 高田保馬

ヘーゲル史觀の實踐的構造……經濟學博士 石川興二

時論

郵便料の引上……法學博士 神戸正雄

研究

貨幣流通論……經濟學士 柴田敬

貨幣と物價との相關々係に就て……經濟學士 中谷實

株式取引所の機能的本質……經濟學士 今西庄次郎

說苑

農產物生產費計算に於ける自家勞働の評價……經濟學士 八木芳之助

漁業組合に於ける出資制度……經濟學士 蜷川虎三

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

經濟論叢　第三十六卷　第四號　（通卷第貳百拾四號）　昭和八年四月發行

論叢

爲替心理說評價（一）

米田庄太郎

一、高田博士の價格の勢力說の評價　二、アフタリオン教授の爲替心理說の評價（次號）

一、高田博士の價格の勢力說の評價

本雜誌前々號の拙稿中に述べし如く、私は社會的現實態或は社會現象の元素的事實としての心と心との相互作用及び相互關係は、つまりは私が社會的價値判斷作用或は社會的評價作用と稱するもの、社會的强制作用と稱するもの、及び不反省的社會心理作用と稱するものの三種の社會心理作用によりて成立するものにして、かくて純科學的には一切の社會現象は結局は右の三種の社會心理作用によりて成立するものとして、究明さる可きであると考へるのである。そうして夫れ

より推して考ふれば、何れの社會現象をも完全に或は十分に說明し、了解する爲めには、從來一切の社會科學の根本的說明原理として用ひられて居た處の、私の見地から見れば、社會的價値判斷作用、或は社會的評價作用に卽して樹立されたと見做される價値原理や、又社會的强制作用に卽して樹立されたと見做される勢力原理の外に、私が不反省的社會心理作用として始めて公式化せんと企だてて居るものに卽して樹立さる可き第三の原理が、必要であることは明かに洞察されると思ふ。

今此處に上に述べしが如き私の社會心理作用の理論を學んだ一人の經濟學者があつて、從來の經濟學上の價格論を批判的に考察すると假定すると、其の經濟學者が先づ第一に注目することは、從來の經濟學上の價格論にありては、何れの形態に於てにせよ、とにかく價値原理があまりに偏重されて居ると云ふことであらねばならぬと思はれる。そうして其の經濟學者は特に限界效用說を重要視する人であるとするも、現實なる價格現象は結局は只限界效用說のみによりては說明され得ないことを觀破し、更に他の何等かの原理を以て之を補充することの必要なるを痛切に感じるであらう。そうして其の際其の經濟學者が先づ思ひ當るのは、社會科學史上殊に直接に經濟學史上に於ても時々唱へられた暴力原理を精練し、私が社會的强制力と稱するが如きものに卽して洞察される勢力(マハト)或は力の原理を以て、價値原理を補はねばならぬと云ふことであらう。今かかる經濟學者を、私の學問上最とも緣故の深い我が高田博士に於て見出したことは、私の最と

も喜ぶ處である。

高田博士が價格論に於て特に限界效用說を重要視されることに就ては、種々なる批評が加へられるであらうが、併し私が此處に問題とするのは其の點でなく、同博士が只價値原理だけでは價格現象を到底十分に說明し得られないことを觀破して、勢力原理を以て之を補はんとされて居ることの方法論的重要性である。同博士の此の企だては、今日經濟學の理論に於て最とも注目す可き一傾向であると思はれる。そうして私は同博士の價格の勢力說を以て輓近の經濟學上に於ける一卓見と認めたいと思ふ。されば今日の獨逸の著名なる一經濟學者アルフレット・アーモン敎授が高田博士に送られた書簡中に

Ihre Abhandlung habe ich noch genau studiert und bin zur Ueberzeugung gekommen, dass Ihre Anschauungen in Wesentlichen nur ganz originell, sondern auch richtig sind.

と云はれて居るのは、決して過賞でないと思ふ。尙ほ私はアーモン敎授自身も、若し私の社會心理作用の理論の如きものを學ばれて居たならば、早くから高田博士と同樣な見解に到達されて居たであらうと思ふ。

今高田博士の價格の勢力說は、同博士が幾多の論文に於て、更に經濟學新講第二卷に於ては組織的に、詳しく論述されて居るものにして、此處に其の學說に就て特に述べる必要はないと思ふから、只私が其の學說の評價から、アフタリオン敎授の爲替心理說の評價に移り行く途行きを示

すに必要と考へる範圍内に於て、極簡單に述べるに止めたいと思ふ。併し高田博士の價格の勢力說の内容は、隨分と複雜なものであるから、夫れの眞髓を摑む爲めには、自(オノヅ)から之を批判的に考察せねばならぬ。

高田博士の價格の勢力說の眞義を了解せんとするに當つて、吾々の先づ第一に遭遇する困難は同博士の勢力(マハト)の一般的概念が判然(ハツキリ)して居ないことである。そうして夫れが爲めに同博士の勢力の概念を暴力の概念と同一視せんとする人もある樣であるが、併し同博士の勢力の概念はそんな粗雜なものでなく、社會學的に精練されて居るものであることは、勢力に關する同博士の論述を見れば明白である。しかも同博士の勢力の概念はまだ社會學的に十分に精練されたものでないことは疑はれない。それで私は輓近續々現はれて來た Macht に關する獨逸系の社會學者の說や、autorité に關する佛蘭西系の社會學者の說や、social controle に關する英米の社會學者の說なぞを參考して、同博士が勢力の概念を十分社會學的に精練し、判然規定されることを希望する。

高田博士の價格の勢力說の眞義を了解せんとするに當つて、次に吾々の遭遇する困難は、同博士の勢力の分類に判然しない點のあることである。同博士は勢力を先づ根本的に經濟的勢力と、經濟外的勢力、又は社會的勢力、又は「固有の意義に於ける社會的勢力」とに大別し、兩者の夫れ夫れの概念及び差異を一般的に論じて、左の如く述べられて居る。

經濟的勢力と云ふは、一財の提供によりて交換の相手から何物かを獲得し得る能力である。それは常に、財の提供に伴な

ふ力である點に於て、他の社會的勢力から異なる。今、經濟的勢力と對立せしめて用ふる經濟外的勢力又は社會的勢力と云ふは財の提供によらずして相手の意志を動かす能力に外ならぬ。巨富を擁する威勢といへどもまた其の中に屬する。

右の言述によりて考へると、高田博士は經濟的勢力は「財の提供に伴なふ力である點に於て、他の社會的勢力から異なる」と云ふことによりて、經濟的勢力を一種の社會的勢力と認められて居ることは明白である。然るに一方に於ては右の如くに經濟的勢力を本來一の社會的勢力と認めながら、他方に於ては經濟的勢力に對立すると云はれる經濟外的諸勢力を直ちに社會的勢力と總稱して、宛かも經濟的勢力は一の社會的勢力ではないものの如くに論じられて居るのは、其處に一の矛盾がある樣に感じられる。しかし私は同博士の立てんとする區別は、つまり經濟的社會的勢力と經濟外的社會的勢力との區別を意味するものと解することによりて、同博士の眞意を正當に把握することが出來ると考へるのであるが、しかも同博士の眞意は又、本質的に經濟的勢力と社會的勢力とを區別せんとする點にある樣にも解せられる。と云ふのは同博士は經濟的勢力は「固有の意義に於ける社會的勢力」ではない樣にも論じられて居るからである。併し經濟的勢力は「固有の意義に於ける社會的勢力」或は本來社會的勢力でないとすれば、夫れは「固有の意義に於ては」或は本來如何なる性質の勢力であるのであらうか。

尙ほ高田博士は、經濟的勢力は「財の提供に伴なふ力である點に於て、他の社會的勢力から異なる」と云はれて居るが、然らば財の提供に伴なふ一切の社會的勢力は經濟的力であると云はれ

るのであらうか。例へば賄賂、買收等の如く、財を提供して相手の意志を動かすことも、ヤハリ經濟的勢力であるであらうか。若しそうであるならば、「巨富を擁するものの威勢」もヤハリ經濟的勢力と云はねばならないのではあるまいか。抑々「巨富を擁するもの」は何故に威勢を有するのであるか。或は何故に人々が「巨富を擁するもの」を尊敬し、又かかる人に服從するのであるか。是れかかる人は何時でも、亦如何なる場合に於ても、他人に財を提供し得るが爲めであるのではあるまいか。如何に巨富を擁するも、公益の爲めや慈善の爲めに財を提供しない人は、古來威勢を有しないではないか。但し高田博士が財の提供と云はれるのは、只交換の爲めに市場に財を提供する場合に於ける提供を、意味するだけのものであると解すれば、上述の諸疑問は起らない。

併し夫れと同時に、只かかる場合に作用する力、或は社會的勢力のみを、特に經濟的勢力と稱し、夫れ以外の場合に作用する經濟的勢力は、全く存在しないものの如くに論じられて居るのは、あまりに經濟的勢力の概念を狹く限定し過ぎ、一般に社會學を始め一切の社會科學に於て政治的勢力、宗教的勢力、倫理的勢力等々に對して經濟的勢力なるものを認める場合に、大なる不便を生じ、思想の混亂を起しはしまいか。高田博士自身も經濟的勢力の概念を常に上に述べしが如き狹義に用ひられて居ないことは、價格の勢力說を論述されて居る其の場合に就て見るも明白である。其の一例をあぐれば、同博士は經濟外的勢力又は社會的勢力又は「固有の意義に於ける社會的勢力」を、經濟的勢力から異なり、之れと對立するものとして、稍々詳しく論述される場合に、

之を「組織せられたる社會的勢力」と、「未だ組織せられざる社會的勢力」とに大別し、そうして未だ組織せられざる社會的勢力とは、「個人間の相互作用の間から形成せられ、其の中に存在する」ものと解し、夫れに於ける優越の根據となつて居るものを分析して、「(a)優越せるものに分配せられたる組織せられたる勢力の大さ、(b)彼の富、卽ち全經濟的勢力、(c)個人的なる優勝の能力、及び他人をば、傳習的に、神威的に服從せしむる諸條件」を列擧されて居る。そうして夫れにより て考へると、高田博士は「富卽ち全經濟的勢力」を、經濟的勢力から異なり、之れと對立する社會的勢力の一根據と認められて居ることは明かであるが、併し夫れは又財の提供に伴なふ力として、社會的勢力から區別され、之れと對立するものと云はれる經濟的勢力とは異なれる、經濟的勢力を意味するものであらねばならぬことも、明かであると思はれる。

只以上簡單に述べしだけによりても察知される如く、高田博士の經濟的勢力の概念には判然しない點が見出されるのであるが、更に同博士が夫から異なり、夫れと對立すると認められて居る經濟外的勢力又は社會的勢力、又は「固有の意義に於ける社會的勢力」の概念に至つては、其の範圍の甚だ廣大なるが爲め、一層不明な點が多いと思はれる。併し此處では最早其の概念に就て論述して居る暇はないから、敢て論及せずに置き、只高田博士が價格の勢力說を科學的、論理的に十分基礎附けられる爲めに、其等の基本的諸概念を十分に精練し、調整されんことを切望するに止め、是れより同博士の價格の勢力說の眞髓を究明して見たいと思ふ。

今高田博士が特に價格の勢力說を論述されて居る場處だけを一見すると、同博士は全く或は根本的には經濟的勢力及び社會的勢力のみによりて、價格を說明せんとされて居るものの如く感じられる。さればアーモン敎授も、高田博士に送られた、書簡中に左の如く述べられて居る。

Nur betoren Sie, wie ich glaube, formell das Machtprinzip etwas zu stark, so dass es Manchmal den Anschein hat, als ob Sie der Ansicht wären, dass die Preise der Produktionsmittel ausschliesslich durch das Machtprinzip bestimmt Würden.

併しアーモン敎授は直ぐ右の言葉に續いて、左の如く述べられて居る。

Während Sie doch, wenn ich Sie richtig verstehe, in Wirklichkeit der Ansicht sind, dass das Machtprinzip innerhalb des Rahmens, welcher durch die Gleichgewichtsbedingungen gegeben ist, wirkt. Daggegen ist, wie ich schon in Fukuoka gesagt habe, meiner Ansicht nach nichts Prinzipielles einzuwenden.

右のアーモン敎授の批評に對して、高田博士は「經濟學新講」第二卷の自序中に左の如の云はれて居る。

これは本書附錄第二章「價格の勢力說」に對して加へられたるものであるが、私は此の批評の道理あることを思ふ。本書の主部分に於ては、かゝる批評の加はらざるやうに、戒心して論述したつもりである。

尙ほ高田博士は同書の中に

マーシャルにありては需要の側が限界効用によりて、供給の側が究極に於て勞働の苦痛によりて決定せられる。私は需要の側を支配する原理の限界効用に存することをまづ認めてゆかう。而も、私は供給の側を——少なくも競爭の十分なる場合——決定するものが社會的勢力にありと見る。此の意味に於て、價格決定の人的方面に存する因子としては一方に効用、他方に社會的勢力の二を對立せしめる。私の價格の勢力說は、これ以上のことを述べようとは思はない。

と述べられて居る。して見ると高田博士はアーモン教授の批評を承認し、價格は只勢力のみによりて決定されると考へられるのでなく、價値原理と勢力原理との兩者の作用によりて決定されるものと考へられて居ることは明白である。しかも高田博士が價格の勢力說を論述して居られる處だけを見ると、價格は根本的には殆んど全く勢力によりて決定されるものと主張されるが如き印象を、讀者に與へるのである。然らば何故に同博士の價格の勢力說の論述は、同博士の眞意でないものを同博士の思想であるが如き印象を、讀者に與へるのであるか。要するに夫れはつまり、同博士は價格の勢力說の論述に於ては、價格を決定する最後の因素としての生產手段の價格を決定する最後の原因を探究する爲めに、專ら力を注いで居られるからではあるまいか。

今高田博士の價格の勢力說の論述に就て考へると、同博士は「價格を根本的に決定するもの」があると確信されて居る樣である。そうしてかかる確信の方法論的原理を左の如く述べられて居る。

完成財の需要數量、その供給數量、その價格、生產財の價格、生產財の各完成財の生產への割當、これらはすべて相互依存の關係に立ち、相互に決定し、從ひて同時に決定せらるゝ未知數として取扱はる可きものであること、前述の通りである。然れども此の複雜なる相互的決定機構の綱の中にありて、一すぢ特に大きく貫ける中軸の絲はないか、換言すれば價格を根本的に決定してゐるものはないか。價格が他の未知數と共に、互に密接なる依存の關係に立つことを認むるにしても、なほ此の問題は提起せられ得る。社會現象はすべて相互作用、相互制約の關係に立ちながら、なほ常に、その一に對して何れが原因であるかを考察することの許さるゝ以上、この問題の提起は當然に許さる可き事柄である。

右の思想は高田博士の社會學及び經濟學を常に貫通して居る、方法論的一原理であると思はれ

る。そうして從來の社會學や從來の經濟學にありては、同博士の云はれる如く、「社會現象はすべて相互作用、相互制約の關係に立ちながら、なほ常に、その一に對して何れが原因であるかを考察することの許さるるもの」と信じられて居たのである。元來因果の概念、嚴密に云へば一方的因果關係の概念は人間が原始時代から抱いて居るものにして、そうしてカントが、一方的因果關係の外に相互的關係を悟性の一の獨立なる範疇として設定し、又ヘーゲルは相互的關係を一方的因果關係以上の高等なる思惟の一範疇と認めたに係らず、近頃に至るまでは、總て科學は結局は一方的因果關係を究明することを、其の根本的任務となすものの如くに考へられて居たのである。かくて一切の社會科學が取扱ふが如き相互作用、相互制約の甚だ複雜なる現象にありても、ヤハリ結局は之を「根本的に決定してゐるもの」があると信じられ、そうして一切の社會現象の科學的研究は、つまり其の「根本的に決定して居るもの」を發見し或は洞見することを、最後の任務となす可きものの如く考へられて居たのである。私は上述の高田博士の論述を見て特に興味を感じて憶ひ起したことは、エンゲルスが晩年に至つて唯物史觀の根本原理を寬和して述べた言葉である。彼は千八百九十年にブロッホに送れる書簡中に「唯物史觀に從へば、歷史に於ける最後（最後の審判所に於て）の規定的契機は現實的生活の生產及び再生產である。夫れ以上はマルクスも自分も嘗て主張したことがない」と云ひ、又千八百九十四年にシュタルケンブルクに送れる書簡の中に「政治的、法律的、哲學的、宗教的、文學的、藝術的等々の發達は經濟的發達に基いて居る。併し等總て其

の發達は又相互に、更に經濟的土臺に反動する。決して只經濟的狀態のみが能働的な原因にして、總ての他のものは只受働的結果に過ぎないと云ふのでない。しかも相互作用は最後（最後の審判所に於て）には常に自から己を貫徹する經濟的必然性を基礎として行はれるのである」と述べて居る。

今日の社會學者中にも、エンゲルスや高田博士と同樣な方法論的原理を遵奉して社會學を研究して居る人々は少なくなく、又數學的經濟學に於てさへもワルラよりパレトの「マヌアレ」への發展を無視し、或は故意にワルラへ逆戻りせんとする人々もあるが、併し今日の科學論或は科學方法論の進步をよく了解して居る社會學者や經濟學者は、決して社會學に於ても、亦經濟學に於ても、最後の原因或は根本的原因を探究せんとするが如き、哲學的或は形而上學的欲求を、科學の研究に持ち込まないであらうと思はれる。尙ほ此の點に就て吾々の最とも注目す可きは、今日物理學の最尖端を行くと云はれる新量子力學に於ては、顯微鏡的現象もヤハリ統計的確率的法則の支配を受け、原因に關係なきもの（a'causal）と認められ、新物理學はプランクの常數 h の跳梁する領域にして、吾人の凡ての測定は結局は光と電子との相互作用に歸され、從ふて作用量子が關與し來り、測定對象と測定との間の小さな、しかし有限な相互作用があり、此處に一の相對論が起ると云はれて居ることである。從來普遍的必然的な因果法則によりて支配され、嚴密に數學的に測定し得られるとさへ考へられて居た物理的自然現象に於てすら、今や右に述べしが如き見解が勢力を振ふて居るとすれば、複雜極まりなき社會現象に於て「最後には常に自から己を貫徹す

るもの」とか、「根本的に決定して居るもの」とかを探究せんとすることは、哲學的或は形而上學的思惟に於てはとにかくも、科學的思惟に於ては不可能ではあるまいか。

併し右に述べし方法論的問題はとにかくとして、高田博士は「複雜なる相互的決定機構の綱の中にありて、一すぢ特に大きく貫ける中軸の糸」、「換言すれば價格を根本的に決定して居るもの」を求めて、之を生產財の價格に於て發見し、「生產財價格の本原性」、「價格の最後の決定權を有するものは生產財の價格であること」を認められ、そうして左の如く論じられて居る。

「理論的に見て、當初に前提とせられなければならぬものは、生產手段の價格と云ふ因子である」。「完成財の價格は生產手段の價格を決定することは出來ぬ、寧ろ前者が後者を前提とすると見る可きである。與へられたる價値函數、卽ち需要函數の一の組織は技術係數の如何によりて生產手段價格の種々なる組織に相應じ、それと相共に存立することが出來る。而して、此の技術係數はそれ自體、生產手段價格の組織によりて決定せらるゝものである」。「生產手段の價格は第一次的に、而して本原的に決定せられてあらなければならぬ」。

然らば本原的に決定されて居るければならぬと云はれる其の生產手段の價格は、如何にして決定されるのであるか。博士は「畢竟それが勢力關係によつて決定せらるることを意味する」と云はれて居る。然らば其の勢力關係は何によりて決定されるか。それは先づ博士がさきに述べしが如き意味に解されて居る經濟的勢力によりて決定されるのである。そうして博士は更に其の經濟的勢力を幾多の種類に區別して論究されて居るが、結局之を決定するものは、ヤハリ博士が先きに述べしが如き意味に解される經濟外的勢力、又は社會的勢力、又は「固有の意義に於ける社會

段勢力」であるのである。かくて博士の考へによれば、價格形成の根本的決定因素としての生産手決の價格は、當面には經濟的勢力によりて、次には更に社會的勢力によりて、二重に勢力によりて的定されるものとなる。夫れによりて博士が價格の勢力說を大に重要視される所以は、明かに了解されるのである。

今右に述べし如くに、高田博士が「根本的には生産手段の價格は（直接には單純なる經濟的勢力によりてゞあるが、間接には卽ち究極に於ては）經濟外的勢力によりて定まる外はない」と論じて居られることに就て、夫れが同博士の社會學論に對して如何なる方法論的意義を有するかを、隨手に少しく論じて置きたいと思ふ。夫れ價格形成の根本的或は最後の決定因素としての生産手段の價格は「究極に於ては」「經濟外的勢力又は社會的勢力」又は「固有の意義に於るけ社會的勢力」によりて定まるものとすれば、經濟學は夫れ自身の範圍或は範域內に於て、價格形成の究極的原因を究明し得ないと認めなければならぬ。蓋し經濟外的勢力又は社會的勢力、又は固有の意義に於ける社會的勢力を組織的に詳しく深く研究することは、經濟學特有の課題と認めらる可きではないと思はれるからである。そうして是れ卽ち同博士が、社會的勢力を經濟學の範圍內にありては組織的に詳しく深く論究されず、只はんの一般的に又或意味では粗雜に論述されるに止まつて居る所以であらうと思はれる。然らば今經濟外的勢力、卽ち社會的勢力を組織的に詳しく深く研究するは、如何なる社會科學である可きかと云へば、夫れは法學、政治學、倫理學、宗敎學、其他何れの特殊社會科學でもなく、一

般的社會科學としての社會學である可きであると考へるのは、最とも穩當であらうと思はれる。

然るに高田博士の如く、ジムメルの社會學論を祖述して、社會學は他の總ての社會科學と同位にある一の特殊社會科學或は個別社會科學にして、他の一切の社會諸科學が特殊社會科學であるに對して、其の一般的基礎現象を研究する一般的社會科學ではないと考へられるに於ては、社會的勢力を組織的に詳しく又深く研究する科學は存在しないことになつて仕舞ふ恐れがある。併しかかる科學は現實に存在するので、そうして夫れが卽ち社會學であると見るに於ては、かかる社會學なるものは經濟學及び其の他の社會科學に對して、一般的社會科學であると云ひ得られる。私が社會學は一般的社會科學であると主張する一方面は、右の如き事態を意味するものに外ならない。かくて高田博士は社會學論に於ては、社會學を一の特殊社會科學として、他の總ての社會科學と同位にあるものと考へられるに係らず、經濟學に於ては、少なくも私の云ふ意味で社會學が、一般的社會科學であることを實際上證明されて居るのでないかと思はれる。但し私は更に社會學は一切の特殊社會科學の結果を總合するものであると云ふ意味に於ても、之を一般的社會科學であると考へるのである。併し夫れはコントやスペンサーやバールトや其他傳來の社會學に於て、社會學を總合的社會科學或は普遍的科學と見るのとは異なれる意味に於てであることや、又私が此の場合に用ひて居る總合と云ふ概念の精確な意味に就ては、本雜誌に於てさきに公にせる私の論文「總合社會學概念」を參考されたい。

尙ほ私は高田博士の價格の勢力說、及び之れに聯關して上に述べしが如くに見定められる社會

學と經濟學との關係に就て、此處に少しく述べて置きたいことがある。夫れはヴュルケム社會學派の經濟學者シミアン博士(François Simiand)が、千八百九十九年に「形而上學及び倫理學評論」に公にせる論文を始め、「社會學年誌」に於て公にせる幾多の經濟學方法論上の諸論文を蒐集して、千九百十二年に出版せる論文集 La méthode positive en science économique に於て、高田博士の價格の勢力說、及び社會學と經濟學との關係に關する見解と、實質的には大體上似て居る見解を既に發表して居たことである。シミアン博士は同書中澳太利派及び數學派の方法論の批判に於て、經濟的均衡の方程式體系に就て、高田博士の批判に似て居るが、併し一層徹底的に突込みて、遂には其の無效力なるを指摘し、更に價格の形成を個人心理學的に根本的に說明することの不可能性を證示して限界効用說を排斥し、價格はツマリ只集團意識の所產としてのみ、卽ち一の集團表象としてのみ、正當に說明し得らる可きものなるを論證せんとして居る。(本雜誌昭和六年四月號の拙稿「數學的經濟學の論理的構造の批判」(二)參考)然るにヴュルケム社會學派の集團意識なるものは、個人意識に對して外在的にして、そうして之を强制することを外部的特徵とするものであるから、價格は結局集團意識の所產であると云ふことは、つまりは高田博士が價格は結局社會的勢力或は「固有の意義に於ける社會的勢力」の決定するものであると云はれるのと、大體上一致して居るのである。併し集團意識を宛かも與らへれたる一全體の如くに見て、其の形成の過程を詳しく分析して究明しようとはしないのが、ヴュルケム社會學派の一傾向であるから、シミアン博士も如何にして集團意識が結局價格を產出或は形成するかを、或は價格と云ふ集團表象が如何にして形成さ

れるかを詳しく究明しようとして居ない。かくて此の方面から見れば高田博士の社會的勢力說は、シミアン博士の見解を更に詳しく分析的に發展させようとするものと見做し得られるのである。但し私は決して、高田博士の說はシミアン博士の說を稍々詳しく展開させただけのものであると云ふのでない。高田博士はシミアン博士の說を知らずして、獨創的に自說を立てられたものであることは、私自身も保證する一人である。私は此處に只、經濟學の理論の歷史的發達の全體的考察の上から見て、高田博士の說の學史的由來を探究するに於ては、夫れは上に述べし如くに、シミアン博士の說と結び附けて考察され得るものであることを、指示せんとするだけである。

併し高田博士の社會學は、ヅュルケムの社會學と氣脈を通ずる點が少なくない爲めでもあらうが、同博士の社會的勢力の概念は、ヅュルケムの强制の概念と大に似て居る一方面を有つて居る。

本雜誌前々號の拙稿中に少しく述べて置いた如く、ヅュルケムの强制の概念は、私が嚴密な意味で云ふ强制卽ち勢力（マハト）の作用と、夫れから區別する優勝摸倣の作用、詳しく云へば勢力の作用によりて生ずる被强制卽ち服從と、優勝摸倣によりて生ずる心服とを混交して居るものであるが、高田博士の社會的勢力の分析を詳しく吟味して見ると、ヤハリ兩者が混交されて居ることが見出されると思ふ。此處では此の點に就て最早論ずる暇はなくなつたから、讀者自から同博士の「經濟學新講」第二卷に於ける社會的勢力の分析（S. 254–255. S. 362–364.）を吟味されたい。かくて私は先づ高田博士の社會的勢力の概念に於ても、混交されて居る右の兩者を嚴格に區別することによ

りて、價値原理及び勢力原理の外に、第三原理を認めることの必要を論證せんとするので、そうして夫れが爲めにアフタリオン教授の爲替心理說を評價せんとするのであるが、尙ほ此處に私は高田博士の價格の勢力說の評價から、アフタリオン教授の爲替心理說の評價に移り行かんとする途行きを、更により簡單に指示する場合を、高田博士の價格の勢力說の論述中から引き出したいと思ふ。併し最早詳しく述べる暇はなくなつたから、極簡單に述べるだけに止める。

高田博士は「價格が限界效用原理によりて支配され、又決定せらるると見ゆる一の場合（價値函數のみにて、そうして生產手段の價格の同時的なる作用なくして、生產物價格と生產物數量とを決定すると云ふ意味にて）に於て、價格を決定する因子としての勢力の作用し得る範圍が限界效用によりて制限せられて居る一の例」として左の如く述べられて居る。

供給者の見積る價格	1 2 3 4 5 6
需要者の見積る價格	10… 9… 8… 7… 6… 5…

價格は5と6との間の一點に定まるであらう。併しながら、それは此の範圍の中の如何なる點に於てであるか。これに關して、限界效用說からは何等の答解をも與ふることは出來ぬ。これを決定するものは、ただ經濟的勢力關係である」。

右の場合はアーモン教授が高田博士の說を批評して、Während Sie doch, wenn ich Sie richtig verstehe, in Wirklichkeit der Ansicht sind, dass das Machtprinzip innerhalb des Rahmens, welch-

er durch die Gleichgewichtsbedingungen gegeben ist, wirkt と云はれて居る意味を、最ともよく表示して居るものの一と思はれるが、夫れは又私が高田博士の說の評價から、アフタリオン敎授の爲替心理說の評價に移り行かんとする途行きを指示するに、最とも適當なる場合であるのである。要するに高田博士は、右の場合に於て價格を5と6との間の範圍にまで決定するものは、限界效用であるが、併し其の範圍の中の如何なる點に於て價格が定まるかを決定するものは、ただ經濟的勢力關係であると論じられて居るのであるが、然るに私は此の場合に高田博士が經濟的勢力關係と稱せられて居るものを、更に詳しく分析して行くと、勢力原理以外の他の原理も其の中に働いて居ることが洞見されると考へ、そうしてその他の原理と云ふは、卽ち私が本雜誌前々號の私の論文に於て、價値原理及び勢力原理に對して第三原理と稱せるもの、卽ち特に此の場合の如き場合に就て云へば、優勝摸倣及び單純摸倣の作用に於て洞見される一原理であると考へるのである。併し高田博士はまだその第三原理には注目され居ない樣に思ふが、然るに私はアフタリオン敎授が新たに唱へ出された爲替心理說を紹介せる一二の雜誌の記述を一讀した際に、同敎授はその第三原理に着目されて來た樣に感じたので、一度同敎授の說を詳しく吟味して、果して如何程まで同敎授がその第三原理を觀破されて居るかを見極めたいと考へつつ、ツイ其の儘にして置いたのであるが、本雜誌前號中に述べし如く、谷口博士が本雜誌昨年十二月號に同敎授の說を紹介されたのに刺激されて、此處に同敎授の說を詳しく吟味し、評價せんとするに至つたのである。併しアフタリオン敎授は其の爲替心理說に於て、私が新たに確立せんとして居るその第三原理を、果して正當に洞見して居られるのであらうか。次號に於て稍々詳しく論評して見たいと思ふ。